

## 2. IADR Distinguished Scientist Award (Young Investigator Award) を受賞して

江草 宏

(大阪大学大学院歯学研究科 クラウンブリッジ補綴学分野)

第90回 IADR 総会において上記賞を授かる榮譽に浴し、光栄なことに感謝しております。IADR によると、同賞は IADR の最高峰の賞とされる Distinguished Scientist Award のひとつで、約50年間続いている歴史ある賞だそうです。歯科医学の全分野を対象として、その発展に貢献している若手研究者を IADR が毎年1名選考し、その榮譽を讃えるものです。奇しくも、授賞式の翌日に受賞者の年齢制限である四十路を迎え、忘れられない誕生日となりました。

この度の受賞理由は、私がこれまで歯科補綴学の発展に向けて取り組んできたバイオロジーを基盤とした一連の研究、特に iPS 細胞研究を歯科医学に導入した功績ということでした。私を本賞の候補に推薦してくださったのは、ポストドク時代の恩師である UCLA の西村一郎教授です。推薦にあたり、研究業績に加えて私がこれまでに在籍した広島大学、香港大学、UCLA そして大阪大学で培った研究ネットワークや、国際学術誌の編集活動、IADR Hatton Award 第1位受賞など、広範囲の学術活動を強調していただいたことが受賞にとって有利に働いたものと深く感謝致しております。

思い返せば、私が幅広い科学分野の視点をもった研究を志すようになったのは、UCLA で西村先生に師事した事がきっかけでした。ある日のこと、初めて取り組んだ幹細胞研究の成果をどの雑誌に投稿するか話しました。すると西村先生は、「nature に提出してみよう」と言うのです。私は最高峰の学術雑誌を挙げられたことにびっくりして、「歯科補綴学分野の私がようやく出したデータを、そんなすごいところに提出するのは場違いだ」と答えました。すると、西村先生は厳しい口調で言われました。「君は本当にサイエンスに向き合っているか。サイエンスに研究分野による優劣があるのか。君がやっている研究でもノーベル賞学者がやっている研究でも、サイエンスという価値観のもとでは、アイデアや結果は平等に議論されるべきだ。今の君の考えは研究者としてサイエンスを冒瀆している」。この言葉に私ははっとしました。それまで自分は、「歯科だから、補綴だから、できる研究はこの程度だろう」という限界を無意識のうちに設けていたのです。大学で研究・

科学に携わることを目標としながらも、自分で科学者としての可能性を限定していたのです。挑戦した結果、nature への掲載は夢に終わりましたが、西村先生は取敢えてそのプロセスを経ることで、私に研究者としてかけがえのない心構えを伝えたかったのだと思います。

以来、私は「科学という共通言語で語れる研究を通して、歯科補綴学の発展に貢献したい」と考えるようになりました。ただし、現実には厳しいもので、歯科補綴学への貢献を見据えながらも、その領域を越えて科学として認められる研究成果をあげるためには、想像を絶する努力と、能力を引き出してくれる環境や運が必要であるという現実を噛み締めてきました。

ですので、留学後に大阪大学という新天地でラボを立ち上げ、試行錯誤しながら進めた研究成果を評価いただいたこの度の受賞は、私にとって達成感を伴う大きな喜びでした。これも、私の大学人としてのあゆみを支え続けていただいている大阪大学の矢谷博文教授をはじめ、多くの先生方のお蔭と深く感謝致しております。今後はこの受賞の重みを感じつつ、歯科医学の発展に少しでも貢献できるようこれまで以上に努力をいとわず邁進する所存です。最後に、私の志に付き合ってくれている研究グループの皆に心から感謝の意を表し、稿を閉じたいと思います。

## 3. Arthur R. Frechette New Investigator Award, Winner を受賞して

裏口 真也

(大阪大学大学院歯学研究科 クラウンブリッジ補綴学分野)

本年6月にブラジルのイグアスの滝で行われた第90回 IADR 総会において、歯科補綴学研究グループの Arthur R. Frechette New Investigator Award の Winner を受賞し、大変光栄に存じます。本賞の一次選考では、歯科補綴学分野に提出された演題抄録のなかから、ふたつの部門 ("Material Science/Bioengineering" および "Biological Science/Tissue Engineering") における finalist (最終候補者) が各3名、合計6名選出されます。各 finalist は IADR 総会の1か月前までに発表内容を論文形式にして提出しなくてはなりません。この論文原稿と総会での口頭発表および質疑応答をもとに最終審査が行われ、各部門に1名の Winner が選出されます。Winner のプラークには、私の指導教員である江草宏先生を含めた歴代の受賞者の名前が彫られており、受賞の重みを感じるとともに、大学院生の間にこの賞を受賞できたことを嬉しく思います。

この度、受賞対象となった演題、"Enhanced Osteogenesis of iPS Cells by Id2 Gene Knockout" の研究は、私が大学院生として興味をもって進めてきたものです。iPS 細胞は、従来の組織幹細胞や ES 細胞のように、細胞採取時の侵襲や受精卵を取り扱う倫理的問題、移植時の免疫拒絶反応などの問題が少ない幹細胞と考えられており、その再生医療への応用が期待されています。一方で、iPS 細胞には未解明のことが多く、iPS 細胞



オープニングセレモニー授賞式にて Dianne Rewok IADR 会長よりプラーク授与